

二次元ぷち文庫

狩野景

表紙イラスト：にの子



しゃまにっく
エクストラ
Shamanic Extra

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『しゃーまにつくエクストラ』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『しゃーまにつくハーレム』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

シャーマンア
エクストラ
Shamanic Extra

狩野景
表紙／にの子

登場人物紹介

Characters

しずさわ きくの

静沢 菊野

おっとりした性格の巨乳戦闘メイド。一目惚れして以来、主人である聡に首ったけ。

ねこみ かぐら

猫実 神楽

元気いっぱいの巫女少女。聡の幼馴染みで、彼の事が大好き。

あやのこうじ ひな

綾小路 雛

聡の事が好きだが、素直に気持ちを伝えられないツンデレ少女。

こうみょうじさとし

光明寺 聡

霊媒体質で、トラブルに巻き込まれがちなごく普通の少年。

「やつと二人きりになりましたのですわね、聡さとしさまあ♪」
 「そ、そうだね、菊野きくのさん……。それにしても、神楽かぐらちゃんも雛ひなも、同じときに家の用事で帰かえっちゃうなんてね」

調子っぱずれな言葉遣いで喜ぶメイド服姿の少女に、引き攣つった笑顔で頷く。穏やかな童顔に銀縁眼鏡をかけた霊媒体質の少年、光明寺こうみょうじ聡は、とある事件を切っ掛けに三人の美少女たちとこの少々手狭なアパートに同居していた。

今日は退魔術が得意な格闘巫女である幼馴染みの猫実ねこみ神楽と、聡と同じ霊媒体質の名家の令嬢、綾小路あやのこうじ雛は、共に実家からの急な呼び出しで里帰りしている。

その二人が名残惜しげに出かけてすぐに、家事全般から軍事的殲滅せんめつ作戦まで様々なニーズにお応えする汎用戦術格闘メイド、静沢しずさわ菊野は、昼の床に指で「の」の字を書きながら、正座の膝を崩して躍り寄り、とろんと緩んだ半眼の瞳で恋慕の眼差しを注いできたのだ。艶やかな青紫の髪を白いレースのヘッドドレスで飾って、腰まで長く垂らす。柔らかな輪郭の顔は呑気な笑みを絶やさず、見ているだけで心が和やわらいでくる。

だがその癒し系の顔立ちに反して、肩口から背中まで大胆に露出させた黒いホルターネックのワンピースのメイド服に包んだ肉体は、和なごめるどころの騒ぎではなかった。大きく開いた胸元にギャザーの寄った白い胸当てが、その布地の皺を伸びきらせて巨大といって差し支えない乳房を二つ、ふとした弾みにもこぼれ出てしまふような危うさで辛うじて包

み込んでいる。

双房の重なり合った狭間に深い谷間を刻んで、呼吸の微かな動きにもたふたと絶え間なく揺れて弾む。それだけの爆乳を有しながらも彼女の肢体そのものは無駄なくしなやかに引き締まり、コルセットの上からフリルの白いエプロンを巻いた腰を細く引き絞る。

パニエで優雅に膨らまされた黒のスカートはムッチリと肉感的な熟尻が桃の形に浮かび上がり、白いフリルで縁取られた丈の短い裾から、ニーソックスを穿いた柔らかそうな生足がすらりと伸びている。

もう何日も一緒に暮らし、何度も身体を重ね合ったというのに目のやり場に困ってしまふ。仕方なく黒の付け衿を巻いた長く細い首に眼差しを曖昧に漂わせ、頬を熱く染めてみると、菊野は膝同士が触れあう程の近さにまで寄って、生涯の主と定めた聡の手にそっと自分の手のひらを重ねてくる。

「……っ！ き、菊野、さん……？」

ふわりと真綿に包まれたような柔らかさを手の甲に感じ、驚いて顔を上げると、嬉しそうな美貌がますますニコニコと相好を崩す。釣られて笑うとおっとりとした声が桜色の上品な唇からこぼれ出た。

「幸せですわ。こうしてお慕いする聡さまとたった二人きりで、閉めきった淫靡いんぴなお部屋で悩ましく同じ空気を吸うことができるのですもの。んふ……、聡さまのお吐きになった

息がわたくしの肺に入ったり、わたくしのこぼした息が聡さまのお身体に吸い込まれたりしているのかと思うと、それだけでゾクゾクして……。ふ、ふアア……。!!」

卓越した妄想力にさっぱりついて行けない。それでも気の良い少年が強張った愛想笑いで応対していると、ぶるんと身震いしたメイド娘から甘ったるい香りが漂ってくる。

(ん……? な、なんだ、これ。なんか、どこかで嗅いだような……)

妙に胸を落着かなくさせる香氣に戸惑っていると、菊野は丸い膝頭を乱してはみ出させた短いスカートの裾を指先で摘み、エプロンごとそつと捲り上げた。

「ちよ、ちよつとっ! 菊野さん、なにを……つて、え、ええ……ええ——っ!!」

裸身を知っている間柄とはいえ、女性のこうした仕草はやはりどうしても動揺してしまう。思わず顔を覆おうとするその寸前、正座を崩した肉感的な脚と美麗な桃型を拉げさせて座る尻の周り、まるで失禁したかのようにねっとりとした液体が広がる様が目に焼きつく。

(お、おしっこ、漏らしちゃった……? いや、いや、ちがう。それなら匂いが……。ま、まさか、こ、これって……!!)

目を背けるのも忘れ、見入ってしまう。無色透明のねとつと軽く粘った、落ち着かぬ甘い香氣を振りまく雫。

「聡さまと二人つきりになれた瞬間からずつと濡れてしまっていたのですけれど、あれこ

ああ、太いいっ!! お、奥うっ! 奥、当たるっ!! 当たっちゃ……」

——ぬじゅじゅっ! ずむんっ!!

根元まで極太がみっちり埋まり、恥骨同士がぶつかり合う。膣の奥深くへ深々と収まった剛直の先端が、鼓動に蜜液を溢れさせる子宮を突き上げる。

「——きゅはふああああっ! んひい!! ひいふあああ——っ!」

途端に歓喜に戦慄いた菊野の身体が、ガクンと仰け反って痙攣した。

白いニーソックスを穿いた両脚だけをしっかりと少年の腰に絡みつかせ、雰囲気ある美貌を快楽に弛緩させて何度も全身を波打たせるその胸元、左の乳房が白い布の胸当てからぼろんと弾け出る。真っ白な練乳の詰まった巨大な水風船を思わせる見事な爆乳。服を着ていようがいまいが、男の欲望を驚挿みにして視線を強引に引き寄せる、戦闘メイド最強の武器と呼んで過言ではない乳。勢い収まらず弾み続ける瓜型房の頂で、全体の大きさに比べ意外なほどに小さな桃色の乳輪に屹立する小粒。その乳首から、

——ぷじゅっ! ちゅぷぷっ!! ぴゅちゆる、ぴしゅっ! ぷっしやあああああああ

——ッ!!

神々しささえ感じる純白の迸りが、勢いよく噴射され聡の顔面を直撃した。

「ぷっふああっ! あう、き、菊野さん、これって!?!」

鼻孔を埋め尽くす甘やかな香氣。口の中に飛び込んできた雫を吸ると、濃厚で甘露な味



わいが味みらい蕾に広がる。前にも口にしたことがある美味に驚いて伺うと、菊野は息を荒くしたままで恥ちずかしそうに目元を赤く染めた。

「わたくしの、母乳なのですわ。あれ以来、お乳が溜まるようになってしまいました……。いつもは溢れそうになると自分で吸って処理していたのですが、聡さまと二人きりで愛し合えた嬉しさのあまりでしょうか、突然にお乳が張ってきて、堪える余裕もなく嘔き出してしまいましたわ。お恥ちずかしいのですう……」

以前、淫魔との戦いで消耗した聡に靈力を与えるため、神楽の術で菊野の靈力を母乳に変質させ放出できるようにしたのだ。その後、術は解かれ彼女の靈力は変質しなくなったはずなのだが、どうやら母乳が出る体質はそのまま残ってしまったらしい。

恥ちじらう間にも、巨房を波打たせながら乳首から真っ白な母乳が嘔き出し、人肌の生暖かさで降り注いでくる。レースの胸当てに収まったままの右房からも夥しい量の乳汁が溢れて、白い布地はおろか漆黒のメイド服にまで染みを広げていた。

「は、恥ちずかしいだなんて、僕たちを助けるためにそんな身体になったのに……!! 隠れて自分で吸ってただなんて……」

申し訳なさを感じながら、その一方で彼女が自分自身で乳首をしゃぶり母乳を飲み干している姿を想像してしまい、興奮を覚えてしまう。

「いえいえ、聡さまのお役に立てることがわたくしの生き甲斐でありますから。それ

に、わたくしのお乳、とても美味しいのですよ」

氣遣わせまいと菊野は明るい笑顔で指先に母乳を掬い、舐めしゃぶってみせた。キュンと締めつけてくる膣の脈動に、彼女への愛おしさが込み上げる。

「ごめんね菊野さんっ！ 菊野さんのお乳、これからは僕が全部飲んで、楽にするからっ!!」

乳臭い香りが濃さを増して立ちこめる中、止めどなく乳白の飛沫しぶきを散らして濡れ震える爆房へと、聡は無我夢中でむしゃぶりついた。

「へ!? ふあああ——っ!! さ、聡さまあっ！ 聡さまが、ご自分からわたくしのお乳ッ!! ふあああ、嬉しいっ！ わたくし、母乳、飲まれてますうっ!!」

乳首どころか房肉まで口いっぱい頬張る。それでも爆球の数分の一すらも収まりきらない。

その残った房肌と、胸布に収まったままの片球を鷲掴みに揉み遊びながら、舌の上で強張る豆突起をちゅーと吸い上げると、たちまち口腔こうくうが仄かな甘みを含んだ母乳でいっぱいになった。

最愛の少年に授乳する喜びからか、乳白の勢いはしゃぶられる前よりも強くなり、飲んでも飲んでも次々と溢れかえり聡の喉奥を激しく叩いてくる。それでもまったく飽きの来ない味わいに脳裏が蕩けた。

「ひゅああ、おいひいよっ！ 菊野ひゃんっ!! 僕、もう、飲物、これられ、いいかもおっ!!」

「ふああ、で、でしたら。わたくし、いつでもお乳出しますうっ！ 聡さまの喉が渴きましたら、すぐに母乳出しますので、存分にお吸いくださいませッ!!」

歡喜の叫びに応じて白い飛沫が口から溢れるほどに勢いを増し、子宮を圧迫して奥まで埋まり込んだ怒張を、疼痛を覚えるほど強くヴァギナの襞が締めつけてくる。

「んふああっ！ きくのひゃんっ!! きもひいよおっ！ ふおんな、お乳い、いつふあいいいっ!!」

もどかしい疼きに腰が跳ねて、肉感的なメイドの肢体を弾ませ牝洞を突き上げる。手のひらに収まりきらぬ爆房をそれでも無我夢中で裾野から頂上へと揉み扱き、たつぷり詰まった母乳を絞りだす。

——びゅううっ！ びゅぶううっ!! ぶじゃじゃ、ぴゅばあああっ！ ペじよペじよペじよ!! ぷっしやあああ——ッ!

顔ばかりか身体中をメイドの乳汁でべちゃべちゃにして乳房を食る。

「ふあ、あああ、聡さまあ、お乳、イイですう……。んふああ、お股も、たまらない、はふああああっ!!」

その様に菊野は聡の頭をさらに乳房へと埋めるように掻き抱いて、とろんと潤んだ瞳で

陶醉していた。

垂れ落ちた母乳は陰茎とヴァギナが繋がりが合った股ぐらにまで達し、激しくストロークする極太に膣内へと巻き込まれた。

——ぬぶぬぶぶつ！　ぐじゆるつ！！　ずびゆるつ！　ぶじゅつ！！　くちゆるぐぢゅつ！　びゅばつ、ぬびゅぶつ！！　どぶぶぶぶつ！

脈打つ鬚と節くれ立った勃起幹の擦れあいかくはんに攪拌され、膣奥から分泌されたたつぷりの愛液を乳白色に染めて膣口から溢れさせる。その様に気が付いて、メイドが抱き締めた主の髪を指に絡めながらウツトリと妄想を巡らせた。

「はふう、お股からも、お乳出ちゃってるみたいに見えてしまいますうっ！　聡さまの御勃起に突かれて、子宮まで乳房になったかもしれませんっ！！」

仄かに発酵臭漂う発情の体液までもが乳臭く染められて鼻孔を蕩けさせる。

（はふうっ！　菊野さん、の奥、コンコン突き上げると、母乳、いっぱい出るっ！！　も、もつと、菊野さんの母乳ッ、欲しいいいっ！）

飲めば飲むほど後を引いてもつと欲しくなる。さすがに最初の勢いからは収まってきた母乳の噴出を快感で増加させようと、少年は乳房に這はわせていた両手を黒いスカートの下へと潜り込ませ、柔らかな尻を抱え込んで力一杯に引き寄せた。

「——！！　かひあああつ！　ふ、ふへあああつ！！」

じゅぶるっ!! ぶばじゃっ!

圧迫された膣内から母乳混じりの愛液が白く染まった飛沫を散らす。ただでさえ深くまで届いていた極太が、押し潰さんばかりに蜜壺を圧迫して最奥に埋まり来る。驚愕きょうがくに顔を引き攣らせ、菊野の全身が強張り、膣穴の襞がさらに狭く窄まって激しく痙攣した。

「くはああっ! 菊野ふあんっ!!」

勃起肉を揺るがされる快感に根元から熱い衝動が込み上げる。乳首を強く吸い上げながら聴は腰が痙攣したかのようにストロークの勢いを激しく、メイド娘の狭穴えびくを扶った。

ずぼずびゅっ! ぐっじゅっ!! ぬぶぼっ! ぶずんぶずんぶずんっ!! ずむんっ!
太い幹に開いた雁傘が壁襞を刮げ、溢れ来るヌメリを掻き乱しながら乱暴に膣奥を乱打する。

亀頭が子宮へとめり込む度に菊野は歓喜に身震いし、ぐしゃぐしゃに緩んだ顔で聴の髪に頬ずりして喘ぐ。

「はひあああっ! あああ、奥う!! 聴さまが、激しいですうっ! はう、イイツ!! お乳吸われながら、ご主人さまに、こんなっ! はううっ、し、幸せえっ!!」

飲みきれぬ母乳が唇から溢れ、息苦しさに喘ぎながら抽送の勢いを増す中、歓喜たきに滾った尿道へと熱い迸りが込み上げる。

「はうっ! 菊野さん、僕、もう、出る……」

(こ、この人……菊野さんに、欲情してる……!! ぼ、僕のメイドさん、なのにつ!!) その様を目にして、聡の胸の内に黒い感情が湧き上がった。ぴちゃ、ぺちゃ、と自分がこぼした爆乳ミルクを丹念に舌で掬い取って他の男の手を優しく舐めしゃぶっている。(べ、別に、汚れたら、タオルか何かで拭けばいいのにつ! 菊野さんの舌が、僕以外の男を……!!)

湧き上がる嫉妬が抑えられなかった。彼女が自分以外に触れることそのものが許し難い。(僕だけが、菊野さんを、気持ちよくできるんだからっ!)

それまで縮こまらせていた身体に氣力を漲らせ、メイドにデレる配達員を睨みつけた。そして、挿入したまま抜けなくなった剛直を、蠢動し続ける膣の奥深くへ手加減なしに思いきり叩き込む。

「こ、これで、すっかり綺麗に……。ふっ!! ふわっ、はわあああっ! 聡さまああっ!! ああ、だめですっ! だめえっ!! また、お乳ッ! でちや、んふあああああっ!!」

——ぷびゅううっ! ぴゅびゅ、ぴゅびゅっぴゅっ!! ぷっしゅああああ——ッ! せっかく舐め清めた配達員の手ばかりか、顔面にまで生暖かい母乳の直撃が襲いかかった。

「ふあ、も、申し訳、ご……ごいませ……、また、粗相、を……。んはうううっ!!」

驚愕しつつも嬉しそうな配達員に詫びるメイドへと、お前は僕のものといわんばかりの

嫉妬に憤ったストロークを炸裂させる。

「ご、しゅじん、さまああつ！ はああ、だめええつ！！ はあ、激し、すぎますうつ！！
ふあああああつ！！ あふうつ！ 奥う、コンコンきてますうつ！！ そんな、よすぎちゃい
ますうう——ッ！」

絶対に抜けないのをいいことに、思いきり腰を引き寄せてから叩きつける。亀頭のエラ
が膣口に引つかかるギリギリから収縮する襞壁を一気に押し広げて穿つ。

——ずっぽんつ！ ぶじゅびゃつ！！ じゅぐずぶつ！ ぬべじゅぶつ！！ ずぼべばつ！
ぶじゅずじゅじゅばあつ！！

剛直がガツンとハンマーのように膣を激打する度に、拉げた蜜壺から熱い液濁が迸って
艶めかしく泡立つ音色が奏でられる。

「菊野さんはっ！ ぼ、僕だけの、メイド……だからっ！！ 僕以外に、奉仕なんか、した
ら……ダメっ、だからああつ！」

繰り広げられる痴態に魅入って、配達員が興奮も露わに勃起した股間をまさぐっている。
その彼にこれ以上大事なメイドを与えるものと聡が憤った。

捲れ上がったスカート尻房を撓ませる激しい抽送を繰り返し、背後から手のひらに収
まりきらぬ爆房を抱え込んで乱暴に揉み廻ると、母乳の飛沫が指の間に噴きこぼれて熱く
泡立つ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>